

(様式1)

令和6年度 学校評価結果報告書(特別支援学校用)

(1) 学校教育目標	学校と地域での主体的な学びを通して自信を深め、健康で心豊かにたくましく生きる児童生徒を育てる
(2) 現状と課題	個々の障害特性に応じた指導の充実が求められているため、特別支援教育に関する専門性の向上、児童生徒が主体的に活動できる授業づくり、生徒指導の充実、小・中・高の一貫性のある教育などが課題である。
(3) 重点目標	1 児童生徒が主体的に取り組むための「楽しい」「面白い」魅力ある授業づくりの実践
	2 全教職員の協力体制が発揮できる学校づくりを目指す
	3 各障がい特性に対応した研修の推進
	4 各学部が連携した一貫性のある「キャリア教育」の推進
	5 特色ある学校づくり「絵と花のある学校、子どもたちの歌声がひびき、笑顔いっぱい为学校」とスポーツ活動の推進
	6 地域社会における本校児童生徒に対する理解促進と交流及び共同学習の推進
	7 地域における特別支援教育のセンター的機能を生かした、地域への積極的な情報発信と貢献
	8 教職員の働き方改革
(4) 結果の公表	保護者、本校職員のアンケート評価結果をそれぞれに配布するとともに、学校のホームページに掲載する。

学校整理番号	特19
学 校 名	青森県立七戸養護学校
対象障害種別	視覚・聴覚・知的・ <u>肢体</u> ・病弱
自己評価実施日	令和 6年 11月 29日(金)
学校関係者評価実施日	令和 6年 12月 13日(金)

(9) -イ 学校関係者評価委員会の構成
・ 学校運営協議会委員 9 名 もみのき学園園長、七戸町城内町内会会長 シャーローム理事長、七戸美光園理事長 株式会社エステックス代表取締役社長 青森県立保健大学健康科学部助教 鷹山宇一記念美術振興会理事長 本校 P T A 会長、本校同窓会副会長

自 己 評 価					学校関係者評価	(10) 次年度への課題と改善策
番号	(5) 評価項目	(6) 具体的方策	(7) 具体的方策による目標の達成状況	(8) 目標の達成度	(9) -ア 学校関係者からの意見・要望・評価等	
1	児童生徒が主体的に取り組むための「楽しい」「面白い」魅力ある授業づくりの実践	・児童生徒が学びの目標を自ら意識して、最後まで活動をやり遂げることができる授業実践を行う。 ・保護者及び関係者への説明責任を果たし、児童生徒の教育的ニーズに応じた具体的で妥当性のある授業実践を行う。 ・人との関わりや文化、芸術に親しむ体験を通して、よりよい人間関係の形成、自律的態度、心身の健康、協力、責任、公德心、勤労、社会奉仕などに関わる道徳性を育む授業実践を行う ・体験的な学習やＩＣＴ機器等を適切に活用し、指導と評価の一体化を踏まえた授業実践を行う。 ・教員個々の良さを生かした授業力及び専門性向上を目指した授業研究や研修を行う。	電子黒板を活用し、授業のねらいや活動内容を明示することで、見通しをもって授業に臨む児童生徒が多くなった。 個別的教育支援計画や個別の指導計画を保護者に十分に説明した上で、授業参観や面談を重ね、本校の学習指導についての理解を深めてもらったことにより、保護者から高い評価をいただいた。 校内研究で「道徳」と「プログラミング教育」の二つのテーマを掲げた。教員が主体的にどちらかのテーマを選び、授業実践に取り組むことで、授業力や専門性の向上をはかることができた。また、中堅教諭の中で自らの授業にＩＣＴを取り入れた研究に取り組む者も複数おり、ＩＣＴの活用も一層進んでいる。	A	保護者に児童生徒の教育について、丁寧に説明している。学校として、新しいことに取り組んだり、先生方も専門性向上のために研究や研修に取り組んだりしており、十分に目標は、達成できていると思われる。保護者から高い評価をいただいていることも理解できる。	保護者に対し、本校の教育活動やそれぞれの児童生徒の教育計画について丁寧に説明するとともに、授業実践を見てもらう機会を確保することで、児童生徒の教育的ニーズに応じた授業改善を図っていく。 サポート委員会の授業コンサルテーション機能を活用し、授業改善に生かしていく。
2	全教職員の協力体制が発揮できる学校づくりを目指す	・自分自身のアップデートを意識して教育課題解決に取り組む。 ・チームワークの活性化を図りながら、全教職員が協力して取り組む。	サポート委員会を中心とした校内支援体制が整備され、支援の成果がグループや学部で共有されるようになった。支援対象が、児童生徒、家庭支援から生徒指導事業、授業や学級経営のコンサルテーションと広がり、組織的に課題に取り組む体制が強化されてきた。	B	組織的なサポート体制が強化されることで、先生方にとって風通しの良い安心して指導や学級経営に努められる職場づくりにもつながっている。日常的に協力し合える職場づくりに努めてほしい。	教職員のアップデート意識向上のため、ＡＩ活用を推進し、業務改善につなげていく。
3	各障がい特性に対応した研修の推進	・知的障がい、自閉症スペクトラム、ダウン症及び肢体不自由等に関する指導の専門性の向上を目指す研修を進める。 ・校内研修会等による研修成果の共有と教育活動への効果的な活用を進める。	ＩＣＴ活用、プログラミング教育、道徳など、校内研究や学校課題を受け、外部講師を活用した研修会を実施した。肢体不自由教育の専門性向上を図るため、摂食指導研修会を企画し、多くの教員が受講した。また、上北地区特別支援連携協議会の研修会にも多くの教員が参加し、発達障がいの支援について理解を深めることができた。	B	研修が多く、先生方の負担になっているのかもしれないが、大きな学校であるが故に様々な障がいをも有する児童生徒がいる。研修が多くなるも仕方がない。研修するべきことが多いのは、当たり前と思って、児童生徒のためにがんばってほしい。	授業の充実を図るため、道徳教育とプログラミング教育の校内研修の成果をまとめていく。肢体不自由教育の専門性向上のため、外部講師を招いた姿勢や動きの研修を継続する。校内研修としてＡＩ活用の学習会を設定する。
4	各学部が連携した一貫性のある「キャリア教育」の推進	・各学部段階におけるキャリア教育の充実を図る。 ・学部段階ごとに保護者・地域等への進路情報の積極的な提供を行う ・児童生徒の進路実現に向け、研修会等を通して、進路指導力の向上を図る。	キャリアの全体計画を基に各学部の児童生徒の生活年齢等を踏まえた内容で学習を進めた。また、全校でキャリアパスポートを活用し、小中高一貫したキャリア教育に取り組んでいる。特に高等部においては、キャリアチャレンジ（生き方教育）を実施し、外部講師を活用しながら、生徒のキャリア発達を促す機会を継続的に設定することができている。 進路情報誌や福祉サービス情報集など、進路に関わる情報を積極的に発信しているが、小学部の保護者への啓発には更に工夫が必要である。	B	保護者アンケートの結果から進路指導に関するニーズが高いのが伺える。就労後のフォローも重要であり、そこまでを含めた進路指導力を向上させてほしい。	各学部のキャリアパスポートを活用した指導や支援における好事例を全体で共有し、キャリア教育の考え方を深め、特に小学部教員の指導力の向上を図る。

5	特色ある学校づくり「絵と花のある学校、子どもたちの歌声がひびき、笑顔いっぱいの学校」とスポーツ活動の推進	・絵のある（造形活動の充実）、花のある（美意識、衛生観念、身だしなみの意識、環境整備）、歌声がひびく（音楽活動）、笑顔いっぱい（明朗快活）の学校づくりを通して、子どもたちの豊かな心を育成する。 ・地域住民からたくさんの評価を受ける機会をつくり、児童生徒や保護者、教職員の自己肯定感の向上を図る。 ・体育の授業を通じた他校等との交流や、特別支援学校総合スポーツ大会への参加を通じ、スポーツ活動及び体づくりの充実を図る。	絵画をはじめ造形作品の作品展や公募への出展を積極に行った。数多くの児童生徒の作品が入賞を果たし、新聞等のメディアにもたくさん報じられた。七養作品展も29回を迎え、入場者も1000人を超えるようになった。音楽活動は再開し2年目となるが、活動の工夫が必要である。 高等部が、道の駅で喫茶コーナーを開いた。小中学部においても、地域とのつながりを深める学習活動の計画に着手はしたものの、実施には至らなかった。 高等部が特別支援学校総合スポーツ大会に参加し、他校との交流を通じてスポーツ活動の充実が図られた。中学部では体育の授業で武道（剣道）に取り組み、武道への関心を高めることができた。	A	今年度も作品展は盛況であった。ただ、会場が分かりづらく、来場者のために会場への案内表示を工夫してほしい。 造形活動や音楽活動は、学校を終えてからも続けられる。多彩な先生方の特技を生かして、指導してほしい。音楽活動についても造形活動のように外部への情報発信やコンクールがあれば応募するなどしてみても良いと考える。 児童生徒の自信につながる活動であるため、続けてほしい。	花のある学校としての緑地整備活動を推進する。また、音楽活動の充実を図り、地域から評価を受けることができるような機会設定を検討していく。 図書室のない本校における読書活動の充実を図る
6	地域社会における本校児童生徒に対する理解促進と交流及び共同学習の推進	・学校と地域が連携・協力した奉仕活動や体験活動の充実を図る。 ・地域の学校との交流及び共同学習（学校間交流）を積極的に実施する。 ・内市町村教育委員会及び管内小学校、中学校に居住地校交流に係る情報発信の充実を図るとともに、居住地校交流実施の拡大に努める。	中学部が七戸中学校と地域の空き缶を拾う清掃奉仕活動を実施したが、充実した交流活動とするには、相手校との共通理解と工夫が必要である。 小学部高学年は、七戸小学校5学年と、高等部は七戸高校や北里大学と交流学習を実施した。 居住地校交流は、小学部児童が24名、中学部生徒が10名が、延べ37回実施され、昨年度より2名増えた。	B	交流校に対しては、本校の理解が進んできているようだ。居住地校交流については、情報発信などの工夫が必要。	居住地校交流に係る情報発信を社会に開かれた教育課程に対応した地域との協働活動の充実を図る。
7	地域における特別支援教育のセンター的機能を生かした、地域への積極的な情報発信と貢献	・上北地区特別支援連携協議会を核としながら本校のセンター的機能を発揮し、地域の特別支援教育に関する取組を積極的に支援している。 ・地域に対して、ホームページや情報機関などを活用し、本校及び特別支援教育に関する積極的な情報発信に努めている。	上北地区特別支援連携協議会主催の研修会への参加者や各地区で開催される教育検査講習会やICT講習会などの講師の依頼が増えた。また、発達障がいや軽度の知的障がいの児童生徒に係る巡回相談や本校の見学なども増えた。地域で育てるべき特別支援教育対象の児童生徒が、本校への転入学を薦められているケースが散見されるようになり、本校のセンター的機能が、地域の特別支援教育推進につながっていない。	B	地域の小中学校の現状が、大変だとは聞いている。実情を確認する必要がある。	地域の状況の把握と地域の市町村教育委員会の本校に対する理解を深めるために、上北地区特別支援連携協議会への市町村教育委員会の参加を積極的に促す。
8	教職員の働き方改革	・教職員の業務負担軽減の取組を進めている。 ・教職員の家庭生活と職場生活のバランスを考慮した業務分担を行っている。	毎月の行事予定を立てる際に会議のない日を設定し、全体に周知したが、急な打合せが入ってしまうことも多く、授業準備に充てる時間が少ないとの意見があった。また、行事を担当する役割が特定の教員に偏ることもあり、業務分担における負担感に差があるとの声もあり、更なる改善が必要である。	B	負担感の本質的要因は何か。個人の計画スキルが原因か。分母が大きい職場の働き方改革は難しい。DXの自由度も民間と比べると低いかもしれない。記録等の情報共有の分野にでも、デジタルを活用した仕組み作りができると良い。	教職員の働き方改革に、教職員自身が主体的に取り組む意識の向上を図るとともに、AIを活用した業務改善に取り組んでいく。
(11) 総括		保護者のアンケート結果からは、22項目中19項目において3.5以上（「達成できている」）との評価を得ていることから、本校の教育活動に対する保護者の理解は高い。また、昨年度と同様に進路指導の充実や教員との話し合いの機会を要望する声が多く、保護者が授業や児童生徒の様子を見る機会や保護者間のコミュニケーションの充実を図っていく必要がある。教職員のアンケート結果からは、業務分担の偏りや研修や打合せが多いことが指摘された。AIを活用した業務改善に向けた取り組みを検討していく一方で、教職員自身が主体的に取り組む意識の向上を図っていく必要がある。				